

「身の丈」

—初稿—

2024/6/30

脚本 太郎

〈人物表〉

木原（18） 高校三年生。

淀川（18） 高校三年生。木原の彼女。

高城（37） 木原と淀川がバイトする書店の店長。

ログライン

恋人の淀川と一緒にバイトができるのを楽しみにしていた木原が、新店長にパワハラされる淀川を見て見ぬふりしたのをきっかけに、後ろめたさと気まぐさから彼女と距離を置き始め、病んだ淀川に襲われる。。。

ねらい

情けない主人公がモンスター化した彼女に襲われる恐怖を描く。

1. 木原宅・木原の部屋（朝）

雑然とした部屋。ベッドの脇にサッシがある。部屋着姿の木原（18）がベッドで寝ている。突然サッシのガラスが割れ、猫の死体が飛び込んでくる。

木原、飛び起きる。

ガラス片と猫の死体が木原の上落ちる。

猫の死体を見下ろす木原。

猫の胴は何か重いもので潰されたようで、血が溢れている。

木原、茫然とした表情。

猫の顔には三か所、刃物でつけられたような切り傷が走っている。

2. 住宅街（夕）

下校中の木原と淀川（18）。

二人は仲睦まじい雰囲気談笑している。

ふと、前から美人の、彼氏と手をつないだ女性が歩いてくる。

木原が女性に気付くと、少しの間見惚れる。

女性とすれ違った直後、淀川が肘で木原を軽く突く。

淀川 「美人だったね、今の人」

木原 「え？ いや……」

淀川が薄く微笑む。

淀川 「わたしと居ても退屈？」

木原 「まさか！ そんなわけないって！ ……えーと、

何の話だったっけ？」

淀川 「もう。バイトの話でしょ？」

木原 「そうだったそうだった！ ……だからさ、もうお

互い受験も済んでるんだし……淀川も、バイトくらいしてみても良いと思うなあ、って」

淀川 「そう思う？」

木原 「うん」

淀川 「木原くんと同じ本屋さんで……って話だったよね」

木原 「そうそう。店長もいい人だし、仕事もそこまでキツくないしき」

淀川、少しだけ思案する様子（形だけ）。

淀川 「……そっか。木原くんがそう言うなら、わたしも

そこで働いてみようかな」

木原 「マジで！？ やった！ 絶対楽しいよ！」

嬉しそうに笑う淀川。

淀川 「うん。楽しみだね、一緒にバイトできるの」

3. 木原たちのバイト先の書店・外観（夕）

ガタガタと机が床に激しくぶつかる音。

4. 同書店・控室（夕）

高城（37）が、机を両手で思いっきり揺らしながら痙攣を起して叫んでいる。机の上の物が落ちていく。高城は生え際が頭頂部付近まで後退していて、肥満体。

木原と淀川を含めた数人の店員たちがドン引きした様子で高城が暴れているのを見ている。

高城 「会計のときくらいイヤホン外せよクソ客があー！
なーんで俺が舌打ちされなきゃいけないーんだよガキのくせによお！ 俺はちゃんと仕事してるだろうがよお！ 俺の仕事は何の問題もねーだろうがよお！ 学生だか知らねーけど社会の歯車を敬えよこのハゲがあー！」

高城、『ハゲ』に合わせて一際大きく机を揺らし、同時に蹴る。

高城 「二度と来るんじゃないやねえ、このハゲ！ ハゲ！
ハゲエーッ！」

勢い余って机がひっくり返る。

高城、荒くなった息を整えると、店員たちを振り返る。

高城 「えー……失礼しました」

高城、神経質そうな目つきで店員たちを見渡す。

高城 「えー遅番の一部の人たちは初顔合わせになるかと思いますが、急遽この店舗を担当することになった高城です。えー前の店長は盗撮で捕まりました」

木原と他数人の店員「えっ」

ざわめきが起こる。

高城が倒れたままの机を蹴る。

高城 「うるせーよ喋ってんだよ！」

ざわめきは止み、高城は一瞬満足げに微笑む。すぐ真顔になる。

高城、落ち着きなくウロウロ歩き回りながら話を再開する。

高城 「えーまあ盗撮云々を抜きにしても？ 本社から前の店長はかなりいい加減な人だったと伺ってます」

淀川が困惑した様子で、木原に何か問いたげな目を向ける。

木原も困惑した様子で首を振る。

高城 「えーしかしながら今日からはですね、心機一転、新体制で頑張ってもらいたいと思います。えーまず皆さんにくつか守ってもらいたいルールがあります。えー一つ、私の仕事のやり方には絶対口を出さな——」

高城、淀川の足に勝手に引っ掛かってかなり派手に

転ぶ（勝手に）。

淀川も転びかけるが、木原が支える。

高城、四つん這いのような姿勢になって、怒りに身体を震わせている。

淀川 「あ、あの……すみませ——」

高城、勢い良く振り返りながら起き上がる。

高城 「てめー何しやがんだクソアマがあ！ 肉でできたオナホの分際でえ！」

淀川、恐怖ですくみ上る。

淀川 「ひ」

高城、淀川を値踏みするような目で睨みつける。

高城 「(淀川のネームプレートを読み上げる)『淀川』

……てめーか？ 新人のじえーけーってのは？」

淀川 「あ、そうです……」

高城 「ハゲが……すっかりシゴいてやるから覚悟しろ

よ？ 俺あ甘くねーかな？」

5. 同書店・倉庫(夕)

木原がカッターナイフで段ボール箱を開けている。

周囲では数人の店員たちが作業をしている。

淀川が入ってきて木原に近付く。

淀川 「木原くん」

木原 「淀川……悪い。その、お前誘ったときは店長変わ

るって知らなくて……それもあんな……」

淀川 「うん、それは仕方ないけど……そうじゃなくてね、

あの」

高城が入ってくる。

高城 「てめ勝手にウロチョロしてんじゃねーよ！」

淀川 「……すみません」

高城 「おめ教えたこと全然できてねえじゃねーか！

ちっとこっち来いハゲ」

高城が淀川の手を引いて出ていく。

淀川は木原に助けを乞うような視線を向ける。

気まずそうに目を逸らす木原。

6. 同書店・店内(夕)

隅で高城が淀川を怒鳴りつけていて、客の一部から

奇異の目を向けられている。

高城 「マジで何度言ったら分かんだよ馬鹿にも程があん

だろ！」

淀川 「すみません……」

高城 「てめさては前世蠅とかかあ？ だとしたら納得だ

わ。虫けらの脳味噌じゃ人間様の言葉理解できま

せんよねえ？」

木原は気まずそうな面持ちで、二人の近くの書棚で品出しをしている。

ふと、淀川の方を見やる木原。

淀川は木原に、助けを乞うような目を向けている。

慌てて目を逸らす木原。

淀川の目に失望の色が混じる。握った拳が震えている。

7. 学校・外観（朝）

8. 学校・教室（朝）

朝のホームルーム前でまだ先生は来ておらず、ガヤガヤしている。

淀川は窓際の席、木原はその斜め後ろの席。席が近いにもかかわらず、お互い一言も話さない。

淀川はずっと窓の外の景色を見ており、木原は気まずそうに俯いている。

9. 木原たちのバイト先の書店・外観（夕）

10. 同書店・倉庫（夕）

高城がカッターで段ボールを切っている。

周囲に何人か作業をする店員がいる。

着信音が鳴り、スマホを取り出して画面を見る高城。

スマホの画面「エリアマネージャー 飯田」

慌てた様子で倉庫の出口に向かう高城。

11. 同書店・裏側の外観（夕）

小走りです歩いてきた高城が外壁にもたれかかって通話に出る。

店員たちへのそれとは違い、ペコペコと過剰に卑屈な態度で応じる。

12. 同書店・控室（夕）

木原を含め数人の店員が椅子に座っている。木原はペットボトルのお茶を飲んでいる。

イラついた様子で入室してきた高城がゴミ箱を蹴飛ばし、ゴミが散らばる。店員一同、驚いてビクツとなる。木原のお茶が少量零れる。

高城、『管理室』と書かれた部屋に入り、ドアを力強く閉める。

すぐに高城が暴れる激しい音と共に彼の叫び声が管理室から聞こえてくる。

高城の声「ろくに現場のことも知らねーくせにゴチャゴ

チャうるせーんだよ！ エリアマネージャーだか

何だが知らねーけどどうせ肩書だけで大した仕事

もしてねーんだろうが！ 生意気言うんじゃねえ

よハゲでデブで豚のケツの穴みてーな顔面してる

くせによおお！」

木原と店員の一人が立ち上がってゴミを片付け始める。

高城の声「つかスマホ越しでも口くせえってどんだけだ

よ？ てめーのクソでも主食にしてんのか？」

『ハゲ』に合わせて一際大きな音が鳴る。

高城の声「スマホ臭くなるから二度とかけてくんじゃね

え、このハゲ！ ハゲ！ ハゲーっ！」

ドアが開く音がし、木原が音に釣られてそちらに目を向ける。

更衣室から出てくる淀川。一瞬目が合うも、すぐにお互い気まずそうに目を逸らす。

元いた椅子に座り直し、俯く木原。

淀川はそことは少し離れた椅子に座る。

13. 同書店・店内（夕）

暗い表情で品出しをする淀川。

突然高城から勢いよく肩を掴まれて何事かを怒鳴られる。

泣きそうな顔で謝る淀川。

店員Aの声「なんかあの店長、前の店舗でも女の子にパワ

ハラしまくって辞めさせたらしいよ」

店員Bの声「なんか女に恨みでもあんのかな」

店員Aの声「さあ。でも可哀想だよな」

店員Bの声「可哀そうだけど……でもあの子がパワハラ一

点に受けてるお蔭で俺ら助かってる節はあるよな」

店員Aの声「まあそりや言えてるか」

店員Bの声「……あの子も、あの感じだとすぐやめちゃう

かもな」

14. 学校・校庭（夕）

校庭では運動部の生徒たちが部活に励んでいる。

下校時刻なので大勢の生徒たちが校庭の隅を校門に向けて歩いている。

その他大勢と同じように歩く木原の横を、早歩きの

淀川が無言で追い抜いていく。

15. 木原たちのバイト先の書店・倉庫（夕）

淀川、カッターでダンボール箱を開ける。

「淀川さん」

淀川、突然高城から肩を強く掴まれる。（かなり無遠慮な勢いで）

淀川、驚いて素早く振り返る。

高城 「（舌打ち）何だよ。そんな大げさに反応すんなよ」

淀川 「す、すみません」

高城 「ちよつとき、今日終わったあと残れる？ 話あるから」

淀川 「えと、大丈夫ですけど……何の話ですか？」

高城 「（ちよつと考えて）その、シフトのこととかだよ。……いちいち訊いてくんなよ、そういうの」

淀川 「すみません……」

高城、淀川の胸の辺りをじっと睨んでいる。（軽く唸りながら）

淀川、困惑する。

淀川 「な、何ですか……？」

高城 「いや、」

高城、舌打ちして去っていく。

高城 「（小声で）『何ですか』じゃねーよ……」

16. 同書店・外観（夜）

17. 同書店・控室（夜）

椅子に座りスマホを操作している淀川。LINEで木原の個人チャットを開いている。指が動いて何か文字を打ちかけるも途中で止め、アプリを閉じてしまふ。

天井を仰いで脱力して溜息をつく淀川。

管理室から高城が出てきて、淀川が立ち上がる。

淀川 「店長……お疲れ様です」

高城 「疲れてねーよ。その変な挨拶やめろっつってんだろ」

淀川 「……すみません。それで、話って何ですか？」

高城はどこか不貞腐れたような態度で、開き直ったように淡々とした口調で言う。

高城 「おう。単刀直入に言うんだが君の身体めっちゃヤ

イプだから一発やらしてほしい」

淀川の瞳が困惑で激しく泳ぐ。

淀川 「えと……は？ え？」

高城 「聞こえなかったか？」

淀川 「いえ、その……ちゃんと聞こえた上で意味が分からないんですけど」

高城 「いや意味は分かるだろ。返事しろよハゲ」

淀川はしばらく、困惑しつつも思案する様子を見せ、言いにくそうに答える。

淀川 「……無理です」

高城 「そうか。……まあ、そうだな。こんなハゲでデブでキモいおっさんとやりたくねえよなあ」

高城は残念そうに、しかし冷静さを保った様子で溜

息を吐く。

そして一泊置いて、気を引き締めるように眉を吊り上げて言う。

高城 「……だが、俺は諦めねえぞ」

高城がカッターナイフを取り出し、刃を出す。淀川が恐怖に顔を染め後ずさる。

淀川 「どういうつもりですか？」

高城 「愛が駄目なら暴力だ。それで俺は自分の身の丈を越えた気になれる」

淀川 「何を言って……」

高城 「気付いたのさ。一生懸命欲しいものに手を伸ばすより、欲しいものを強引に俺の元に引きずりおろしてやる方が楽だし、合理的だって」

淀川、スマホを高城に突き付けて言う。

淀川 「警察……呼びますよ」

高城 「俺にや効かないね」

淀川 「はい？」

高城 「俺昨日人殺しに行ったんだよ。エリアマネー

ジャマーの飯田……クソツたれの顔面アナル野郎」

淀川は驚愕と困惑で口を開けたまま何も言えない。

高城は悔しそうな表情で続ける。

高城 「だが殺せなかった。奴の家の庭に入るとすぐ、犬が吠え始めたんだ。まずいと思った俺は……」

18. (回想) 飯田宅・庭 (夜)

高城が鎖に繋がれた大型犬に吠えられている。

慌てた高城は地面にあった大きめの石で犬の頭を殴りつける。

返り血が高城にかかる。

高城の声 「殺人の覚悟を決めたところで、せいぜい俺に殺れるのは犬っコ口程度だったんだ」

19. (回想) 住宅街・飯田宅前の道路 (夜)

高城が逃げていく。

高城の声「まあ、たとえばあの犬がいなかったところで、
きっと直前には怖気づいていただろうがな」

20. 15. 木原たちのバイト先の書店・控室（夜）

カッターを持ってうつつむきがちに地面を見ながら話を続ける高城。恐怖で硬直している淀川。

高城 「俺は結局アイツが怖いんだ。俺より社会的地位も上でガタイも良いあの男と俺は同じレイヤーに居ないから」

高城、淀川に視線を向ける。

高城 「それはお前も同じなんだろう。俺より若くて見た目もマシなお前は俺より上のレイヤーに居る。付き合えたりするはずがない」

高城、卑屈そうに笑う。

高城 「だが、それは恋愛面の話だ」

21. (回想) 同書店内・本棚の前（夕）

高城に怒鳴りつけられている淀川。

淀川は怯えた表情をしている。

高城の声「お前はいつも俺に怯えている。飯田を前にした俺のように」

22. 同書店・控室（夜）

高城 「物理的な力の面では、お前は俺以下だ」

高城が舌なめずりしながら淀川の方に一歩踏み出す。

淀川も後ずさるが背中が壁にぶつかる。

淀川 「嫌……来ないで」

高城 「飯田の近所の奴に顔見られたし、どうせそのうち器物損壊だかで捕まるんだ。どの道失うものもないし、それまでできるだけたくさん夢を叶えてやる」

23. 木原宅・外観（朝）

24. 木原宅・木原の部屋（朝）

木原、スマホのタイマーで目が覚める。
スマホを見ると、淀川から何件も不在着信が入っている。

木原 「えっ」

驚いて掛け直すも、淀川は出ない。コール音が続く。
スマホ音声「おかけになった電話は電波の届かない場所に

いるか電源が入っていないため——」

木原、緊張した表情。

25. 木原宅・庭（朝）

庭に遺棄された血まみれの猫の死体を見下ろす、部屋着姿の木原。猫の胴は何か重いもので潰されたように、うで、血が溢れている。
木原、茫然とした表情。
猫の顔には三か所、刃物でつけられたような切り傷が走っている。

26. 学校・教室（朝）

顔の一部に包帯を巻いた淀川。
周りの生徒たちはいずれも少し距離を置いて、ヒソヒソ話し合ったりしている。
木原は教室の入り口で、茫然自失とした表情で立ち尽くしている。
淀川が木原に虚ろな目を向ける。木原、慌てて目を逸らす。

27. 学校・外観（昼）

チャイムが鳴る。

28. 学校・教室（昼）

授業中。先生が黒板の前で話をしている。
淀川がじつと木原に虚ろな目線を向け続けている。
木原は必死に気付かないふりをして俯いている。顔

には冷や汗をかいている。

×××

休み時間。教室はガヤガヤしている。

変わらず虚ろな目で木原の方を見続ける淀川。

木原はしばらく苦悶する様子を見せた後、覚悟を決めたように勢い良く立ち上がる。椅子が床とこすれる音が大きく鳴る。

クラスメイトたちの視線が木原に向く。

木原は淀川の席に足を向けるも、途中で軌道を変えて教室から出て行ってしまふ。(うつむきぎみの姿勢)

遠ざかる木原の背中を見つめる淀川の虚ろな目。

29. 木原のバイト先の書店・外観(夕)

30. 木原のバイト先の書店・控室(夕)

茫然とした表情で椅子に座る木原。

31. 学校・外観(朝)

32. 学校・教室(朝)

まだホームルーム前なので先生は居らず、ガヤガヤしている。

誰も座っていない、淀川の席をポーツと見つめる木原。

チャイムが鳴って先生が入ってくる。周囲が静かになる。

33. 住宅街(夜)

コンビニのレジ袋を片手に木原が歩いている。

やがて児童公園に差し掛かったところで、肉を叩くような音と獣の悲鳴がして、木原は足を止める。

木原、音がした公園の方へ目を向ける。

公園の奥に、しゃがんだ姿勢で何かを振りかぶった

34. 児童公園（夜）

人影が見える。人影が何かを振り下ろすと、もう一度肉を叩く音がする。

木原、恐る恐る人影に近づく。

砂場と滑り台とブランコがある。

人影の正体は淀川。滑り台の下で倒れた猫に向けて、両手に持った大きめの石を振りかぶっている。

木原が落ちていたビニールを踏み、音が鳴る。

淀川の肩がビクリと震え、振り返る。

淀川 「……見つかっちゃった」

淀川、石を置いて立ち上がる。

木原はうつむきがち。

木原 「何してんだよ」

淀川、猫を手で指し示して、少し自慢げに、

淀川 「見て分からない？ 猫殺してんの」

木原 「いや、分かるけど……何でそんなこと……」

木原、チラリと倒れた猫を見やる。

猫は瀕死で痙攣している。顔には三か所、刃物でつけられたような切り傷が走っている。

淀川 「ただの八つ当たりだよ。……それより木原くんと

話すの、凄く久しぶりな気がする」

木原 「あ、ああ……」

淀川 「ずっとわたしのこと無視してたもんね」

木原、一瞬言葉に詰まる。

木原 「その、俺もいろいろ考えてたんだけど……でも何言ったら良いかどうしても思いつかな——」

淀川 「（木原を遮って）まあでも、それはお互い様か」

木原、何か言いかけて言葉を飲み込む。

淀川、左腕に巻いた腕時計を見ながら、

淀川 「で？ 木原くんこそ何してんの？ こんな時間に」

木原 「いや、腹減って寝らんないから……ちよっとそこのコンビニで……」

木原、手に持っていたコンビニのレジ袋を強調する

ように少し上げる。

淀川が呆れたように微笑んで言う。

淀川 「ダメだよ、休みだからって。もう大学生気分？」

木原 「そういうわけじゃないけど……てかお前だって――

――

淀川、木原の言葉を遮るように木原に一步近づき、彼の顔をジッと見つめながら言う。

淀川 「木原くん、さっきから全然わたしの目見ようとしてくれないね」

沈黙。

淀川 「……もう良いや、そういう感じなら」

淀川は失望したように小さくため息をつくど、再び猫に向かってしゃがみ込んで、石を持ち上げて振りかぶる。

木原、咄嗟にといった感じで淀川に近づき、中腰の姿勢で彼女の手を掴む（右手で）。

木原 「おい、やめろって！」

淀川が木原を睨むように見る。

淀川 「（苛立ち交じりに）離してよ。何で止めんの？」

木原 「い、いや……そりゃ止めるだろ、こんなの」

淀川が猫に視線を移す。

淀川 「（少し声が震えているが、口調は頑とした感じ）
こんな、死にかけの猫なんかどうでも良いじゃん。
死んじやっても誰も困らないじゃん」

木原 「そんな――」

淀川が再び木原に視線を戻す（睨むように）。

淀川 「（木原を遮って）それに木原くんには関係ないじゃん」

木原 「そ、それはそうかもしれないけど……」

木原の目が気圧されたように泳ぎ、手が離れる。

淀川が視線を猫に戻し、再度石を振りかぶる。

木原、慌てて淀川の手を掴み直す（右手で）。

木原 「いややっぱり、こんなこと良くないよ」

木原、左手を淀川が持つ石に伸ばす。

木原 「その、可哀そうだし、」

木原の手が石に触れた途端、淀川が木原の手を振り払う。直後に叫びながら立ち上がる。石が地面に落ちる。

淀川 「(悲痛さが一気に暴発する感じ) たかが猫じゃん！」

淀川、息を荒げながら、目に浮かんだ涙を拭い、鼻をすする。木原を睨みつけている。

木原、数歩後ずさる。

淀川 「(涙声、早口で一息に) それに可哀そうなのはわたしも一緒じゃん」

木原 「よ、淀川……ごめん。そ、その……」

淀川 「(鼻をすすって) 何で謝んの？」

木原 「いや……」

淀川 「悪いのわたしじゃん！ こんな酷いことしてんだよ！？ わたしが悪いに決まってるじゃん！」

淀川、手を勢いよく振って猫を指し示す。同時に右足で一度地団太を踏む。

淀川 「正しいのアンタじゃん！ アンタの方が謝る筋合いなんでないでしょ！？」

木原 「淀川、お願いだから落ち着いて……」

淀川、俯いて肩を震わせて、絞り出すように言う。

淀川 「何よ、今頃善人ぶって……そんなモラルあるんなら、わたしのときに使ってくれば良かったじゃない……」

木原 「……あ、あのさ、」

木原が一步近づくと、淀川は再び顔を上げて叫ぶ。

淀川 「あの店長には何も言えなかつたくせに！ わたしがアイツより弱いからって正義ぶって！ アンタもわたしと同じじゃん！ 人のこと舐めんのも大概にしるよ！」

淀川、しばらく膝に手を付いて荒い呼吸をする。

木原、その隙に淀川に近付いて、彼女の肩に手を載

せる。

木原 「なあ、淀川。俺が悪かったから……もう帰ろうよ」

少しの間沈黙。淀川は顔を上げない。無言で息を整えている。

木原 「おい、大丈夫か？」

淀川が自分を落ち着かせるように、一際大きく息を吸い、吐く。

木原 「ねえ、木原くん」

木原 「ん？」

淀川、ふいに木原に抱きつく。

木原、驚きで肩を一度震わせる。困惑の表情。

淀川、木原を抱きしめる手に力を込める。

木原はゆっくり且つぎこちなく、義務のように淀川の背中に手を回す。

淀川、木原の胸に自分の顎を密着させたまま顔を上げると、木原の目を真つすぐに見て言う。（表情は悲しみが滲んだような微笑み）

淀川 「わたしのこと、好き？」

木原、淀川の目を見つつも一瞬間を空けて答える。

木原 「好きだよ」

淀川 「前みたいに、キスとかしたいって思う？」

木原、少しの間目線をさまよわせて沈黙し、

木原 「思うよ」

淀川、木原から一步離れる。

顔の包帯を取って地面に落とす。

淀川顔には三か所、切り傷が走っている。

木原は辛そうに顔を歪めて一瞬目を逸らすも、どうにか再び淀川と目を合わせる。

淀川 「セックスは？ したい？ わたしと」

淀川 「（絞り出すような声）……したいよ」

木原、傷ついたような表情（自己嫌悪）。

淀川、少しの間無表情になってから、ゆっくりと微笑む。

淀川 「じゃあ、しようよ。今から」

木原は驚きで呆けたような表情になって聞き返す。

木原 「え、今から?」

淀川、再び無表情になって冷たく答える。

淀川 「そう」

木原 「どこで?」

淀川 「ここで」

木原 「いや、さすがにそれは……」

淀川が大きく表情を歪め、激高しながら木原に掴みかかる。

淀川 「いいからセックスしようよ!」

淀川、木原の服を無理やり脱がそうとする。

木原、自分の服を掴む淀川の手を押さえて制しようとする。

木原 「やめろって! 無理だよ、こんなところじゃ」

淀川、木原の服を掴んだまま一際顔を前に突き出して叫ぶ。唾が飛ぶ。

淀川 「じゃあキスでも良いからしようよ! してよ!」

木原、顔を後ろに引きながらも応じる。

木原 「わ、分かったよ。……するから、落ち着けよ」

淀川、満面の笑顔で木原の右手を握る(両手で)。

淀川 「本当に? 嬉しい!」

木原 「お、おう」

淀川、徐々に徐々に無表情になっていく。手は握ったまま。

淀川、しばらく無言で木原を睨みつける。先ほどまでの沈黙より長め。

木原 「……淀川?」

淀川 「でも絶対嘘じゃん」

淀川、木原の手を放す。

淀川 「(口の中で呟くような小声、かつ早口で) 何なのよその目。人のこと憐れむみたいな……見下した目」

淀川が激しく奥歯を食いしばる。

淀川が木原を突き飛ばす。

淀川 「そんな表情で恋人とキスする奴いねーだろ！」

木原が背中を滑り台に打ち付ける。

淀川がポケットからカッターナイフを取り出して刃を出す。

狼狽する木原は両手を前に出すが、それ以上は身動きが取れない。

木原 「ちよっ……」

淀川が振るったカッターナイフが木原の顔を薙ぎ、血しぶきが舞う。

木原が悲鳴を上げながら顔を両手で押さえて地面にうづくまる。

淀川 「分かるよ。こんな顔の女で勃つわけないよね」

淀川、血まみれの木原の顔を見て、嬉しそうに微笑む。カッターの刃を縮める。

淀川 「でもこれで、お揃いになった」

淀川、カッターナイフをしまつて、木原の傍らにしゃがみ込む。

木原 「ねえ、ビックリした？ わたしなんかこんなことされると思わなかった？」

木原が悲痛な呻き声を発している。

淀川 「ところで……木原くんってさ、この顔になる前も、そこまでわたしのこと好きじゃなかったよね。

『コイツ程度の女子とだったら付き合えそう』くらい気持ちだったんじゃない？」

35. (回想) 住宅街(夕)

木原と淀川が並んで下校している。

前から歩いてくる、彼氏と手をつないだ女性に見惚れている木原。

淀川の声 「きつと……ううん、絶対そうだよ」

木原に冷たい視線を向ける淀川。

淀川の声 「何で分かるかっていうとね……多分、わたしも同じ考えだったから。だから告白も、すぐにオー

ケーできたんだと思う。気軽にね」

36. 児童公園（夜）

木原が顔を両手で押さえて、呻きながらうずくまっている。その傍らに淀川がしゃがみ込んでいる。

淀川 「性欲もて余して『自分以下』に妥協しただけ。それって愛とかじゃないし、恋でもない」

淀川が木原の襟首を掴む。

淀川 「でも、わたしもうそれで良いんだ。どうせお互い、最初から見下し合ってたんだし……なんか吹っ切れた」

淀川が木原を乱暴に引き起こし、強引に抱きしめる。二人の衣服は血でびしょびしょ。

淀川 「わたしだったら、そんな顔になった木原くんでも好きになってあげられる。君がわたしを好きじゃなくても、どのみちもう選択肢はない」

淀川、愛おしそうな表情。

淀川 「これでトントン。何も変わらないよ」

（終）